

レビー小体型認知症サポートネットワーク京都 第3回交流会 活動報告書

日時：2018年7月28日 13:30～15:45

場所：京都府立医科大学基礎医学舎 第1講義室

内容：医師の講話と交流相談会

参加者：49人

第3回交流会では、地域の開業医である神経内科医である辻先生と看護師の長谷川さんのレクチャーと神経内科医と精神科医、ケア専門職と参加者との交流相談会を行いました。以下にその内容（一部）を報告いたします。

➤ レクチャー「ほぼほぼ在宅、時々入院」～医療と介護の使い方・使われ方～

講師：辻医院 辻輝之医師

病院看護師 長谷川看護師

今回の講話のテーマは「ほぼほぼ在宅、時々入院」でした。その一部をご報告いたします。

まずは、看護師の長谷川さんのお話です。事例をとおして、在宅生活していた方が入院となったきっかけ、入院中の変化、その時看護師としてどのように関わったのか、医師に看護師にどのように働きかけたのか、在宅移行に向けてご本人のご意向をどのように調整したのか、看護師としての視点や思考が語られました。

次に辻先生のお話です。レビー小体型認知症の基本的な説明の後、住み慣れた地域で暮らすためにレビー小体型認知症の患者さんの語りの抜粋から何がご本人の中で起こっているのか、症状に対応する地域の社会資源、京都式認知症ケアパスの紹介などの説明がありました。

➤ 交流相談会

6グループにわかれ、1グループの当事者世帯を3世帯とし、医師やケア専門職が入りました。

1人1人の当事者の話に対して、医師やケア専門職と共に話し合いができました。

レビー小体型認知症とアルツハイマー型認知症の薬の調整、内科疾患が認知症の進行に与える影響、リハビリやデイサービスの利用、物とられ妄想・不安症状・幻視への対応などについて各グループで共有し語り合いました。

➤ 参加者の声

家族：専門家の方々の助言がとてもためになった ・ 近い距離感の下で医師から具体的な話を聞いたり助言があり良かった ・ 自分だけでないことに安心した

専門職：薬の知識が深められた ・ 介護家族の思いや意見に対する医師の対応を聞くことが役に立った
サービスを利用したからといって楽にならない介護と症状の進行の受け入れの難しさを学んだ
当事者の思いや意見を知ることができた ・ 家族の一生懸命な姿勢に自分達に何ができるのか考えさせられた